



# 道標

龍馬の道  
【みちしるべ】

◆島原・長崎街道ウォーキングガイド◆





# 龍馬の道へ 長崎旅。

長崎 諫早 雲仙 島原

## 龍馬の道 道標

[みちしるべ]

龍馬の道



◆島原・長崎街道ウォーキングガイド◆

### ◎目次

龍馬の道◆道標繪図

龍馬の道物語 02

二つの街道と  
その街道を  
歩いた人々 04



旅の達人龍馬が  
歩いた道を歩く  
アクセスマップ 32

30

龍馬の軌跡を  
たどる

島原

06

島原街道

あれから  
一世紀と半分／島原 10

08



龍馬の軌跡を  
たどる

雲仙

12

温泉い今昔モ 15

心アタタカ

あれから  
一世紀と半分／雲仙 16



龍馬の軌跡を  
たどる

諫早

18

有喜諫早街道

に刻まれた歴史をたどる  
20

あれから  
一世紀と半分／諫早 22

龍馬の軌跡を  
たどる

長崎

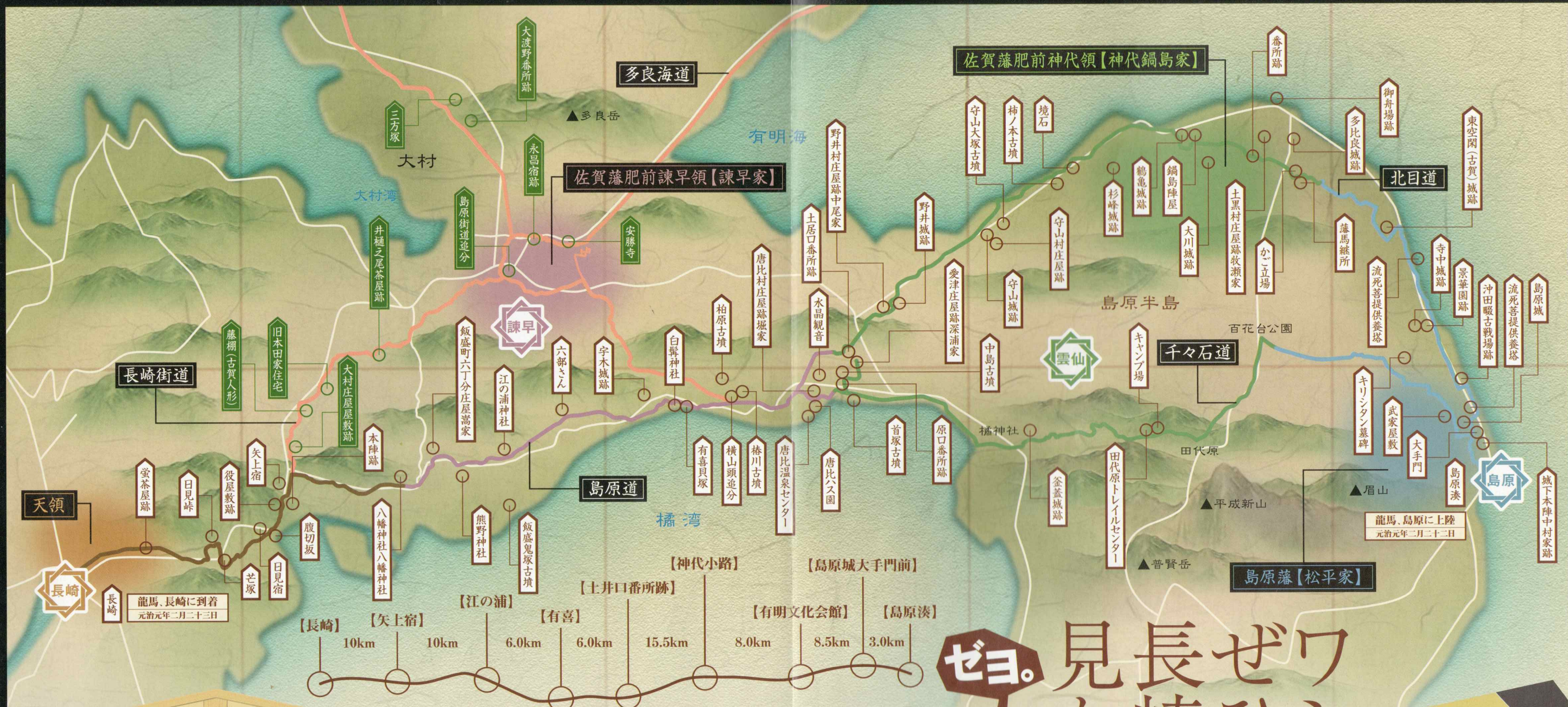
24

長崎の地

に刻まれた歴史をたどる  
26

あれから  
一世紀と半分／長崎 28





ぜろ、  
 長崎が  
 見たか  
 った！

開国とか攘夷とか、尊王やら佐幕やら、日本国中がてんやわんやの文久三年（一八六三）、攘夷派の雄藩長州は、関門海峡を封鎖、そこを通る外国船にドカンと砲弾を放ったのでした。英仏米蘭四カ国連合艦隊は報復として長州攻撃を画策、そこで幕府は事の收拾のため軍艦奉行勝海舟を外国勢との調停役として長崎へ派遣したのでした。この旅に随行したのが坂本龍馬。海舟の私塾、海軍塾の塾頭でもありました。元治元年（一八六四）春、一行は陸路九州を横断し、有明海を渡って島原に上陸。そこから二つの街道を歩き、長崎を目指したのでした。このとき龍馬、三〇歳。

『眠れる龍』でありました。

龍馬の一行は、島原街道千々石道を通ったとされる説と、北目道を通った説があります。この「龍馬の道・道標―島原・長崎街道ウォーキングガイド―」では、北目道を紹介しております。





西へ、西へ、長崎へ

ニッポンの夜明けへと続く道

# 龍馬の道物語

## 龍馬が歩いた街道

「日本を今二度せんたくいたし申候…」  
坂本龍馬は、勝海舟との出会いによつて  
海外へと目を開き、日本の変革を考えるまでに  
遅くなりました。まるで運命の糸に  
導かれるように、長崎に向かつて、  
海舟とともにこの道を歩いていきました。

四カ国連合艦隊の長州攻撃阻止の幕命  
を帯びた勝海舟の随員は大目付など役人、  
坂本龍馬ら総勢五十人ほど。

一行は文久四年(一八六四)二月十四日に  
神戸港を出帆。瀬戸内海をわたり大分佐  
賀関に上陸、そこから豊後街道で九州を横  
断し、二十日に熊本に到着しました。翌二  
日夜、有明海をわたり明けがた島原に上陸。  
そこから島原街道、長崎街道を通り長崎へ  
と向かいますが、その道中を「海舟日記」を  
もとに詳しく辿ってみましょう。

〈元治元年二月〉 ※二月二十四日改元  
「廿二日 払暁、島原へ着船、城下本陣へ休  
息、直ちに立出。此地より長崎迄は、土地  
礫角、田畑の間大石雜わり、小石、道路に  
満ちて甚だ悪し、雲仙の嶽噴出せしによる  
か、西洋に云フアミ之年を経しものあらむ」

「廿二日 会(愛)津に宿す」

日記には二日となっていますが、実際  
には二日早朝、島原湊に到着したことに  
なります。それから島原の本陣でひと休み  
して直ぐに出発。本陣とは大名などの宿  
泊所で、町年寄・中村家の屋敷が利用され  
ていました。痩せ地の悪路を嘆きながら島  
原街道北目道を歩き、神代鍋島領を通り  
愛津の庄屋屋敷に投宿しています。日記中  
の「西洋に云フアミ」とは「lava」(溶岩)の  
ことです。

「廿三日 長崎着、日光(見)峠甚難所、直  
に奉行之御役宅へ行き面会、洋船未着之  
由を聞く、福濟寺旅宿となる」

愛津を出発した海舟一行は、橘湾沿いの  
「島原殿様道」を歩いて矢上宿で長崎街道  
に合流した。この宿場町で昼の休憩をとっ

て、最後の難所、日見峠を越えて長崎の町  
に入りました。

〈元治元年四月〉

「四日 長崎立上、矢上昼食、見立之者彦  
次郎・安之丞、用達筆者兩人、肥前藩杉谷  
雍助、老候之内命あり」

「五日 島原着」

「六日 渡海、熊本着、肥後候より…」

復路は、四十日ほどの長崎滞在を終え四  
月四日に長崎を出発、野井村の庄屋屋敷  
に宿泊。翌日、神代で昼食をとり、同日島  
原別当中村家に宿泊しました。六日に熊  
本へ渡海。

## 初めての長崎

長崎滞在中、海舟は、国内外の要人や薩  
摩、長州藩士との会談、外国軍艦の視察、  
外国人居留地や小島養生所、長崎燐鉄所  
の見学など、多忙な日程をこなしました。  
いっぽう龍馬にとつては初めての長崎。海舟  
の傍らで、見るもの聞くもの、すべてに度肝  
を抜かれたことでしょう。それは、この国際  
都市長崎の自由な空気の中で、新生ニッポ  
ンの龍馬の夢が、確信へと変わった瞬間で  
もありません。





# 街道

## 二つの街道とその街道を歩いた人々。

### 島原街道

島原城大手門前から始まる島原街道は、別名「殿様道」とも呼ばれています。大手門を境に北目道(三倉多比良)神代山田(愛津)と南目道(白土)深江(有家)北有馬(そして西目道(南有馬)口之津(小浜)千々石(愛津)で、総延長一〇〇km。ぐるりと島原半島を一周します。代々の藩主が領内を巡察するための道でもありました。なかでも北目道は、参勤交代や幕末には龍馬らが歩いた主要道でした。また田代原を越えて千々石に到る千々石道があり、長崎への近道として、長崎巡視に往來する道でした。



勝 海舟 (1823~99)

安政2年、長崎海軍伝習所に入所。威臨丸指揮官として渡米後、軍艦奉行に就任し神戸海軍操練所を開設。江戸城無血開城を実現させる。維新後は旧幕臣代表として新政府の要職に就いた。(個人蔵)

望月亀弥太 (1838~64)

土佐勤王党の一員。龍馬の紹介で神戸海軍操練所に入所。長州藩の尊王志士たちとともに池田屋事件で負傷のあと自刃。

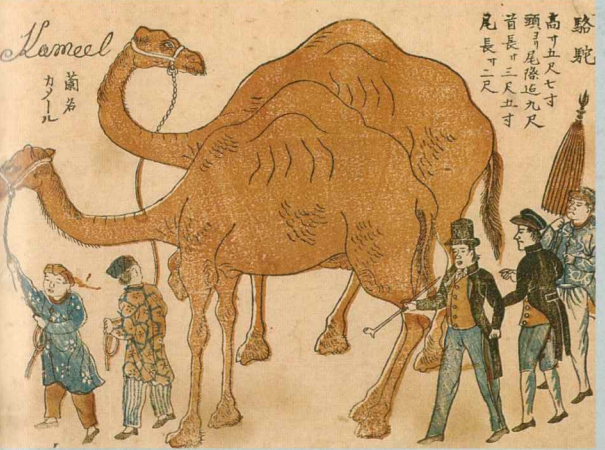
安岡金馬 (1844~94)

土佐藩士。20歳で勝海舟の門下に入る。慶応3年に海援隊に入隊。維新後、日本海軍創設に尽力。



坂本龍馬 (1835~67)

土佐藩を脱藩し勝海舟の門弟となり、海軍塾の塾頭を務める。長崎で亀山社中、海援隊を設立。薩長同盟を成功させ、「船中八策」を提言して大政奉還を実現させるなど、近代日本の立役者。33歳のとき京都近江屋で暗殺される。



「長崎版画」ラクダ図 (長崎歴史文化博物館蔵)



伊能忠敬 (1745~1818)

測量家。56歳から74歳で死去するまで日本全土を測量。「大日本沿海輿地全図」は彼の死後に完成。シーボルトが国外に持ち出したのはこの地図の写本である。(伊能忠敬記念館蔵)



横井小楠 (1809~69)

熊本藩士。熊本の私塾「四時軒」には龍馬はじめ多くの志士たちが訪れた。「船中八策」の原案となる「国是七策」を説いた。長崎には二度来訪。船で島原に着き、この街道を歩いている。



吉田松陰 (1830~59)

長州藩士。萩の松下村塾で幕末維新の志士達に多大な影響を与えた。嘉永3年(1850)雲仙を訪れ「小地獄」温泉に入湯している。「安政の大獄」で刑死。(国立国会図書館蔵)



近藤長次郎 (1836~66)

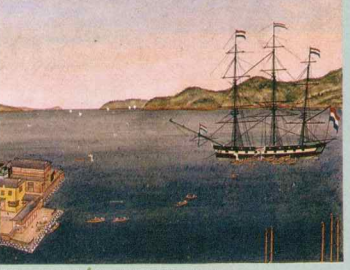
土佐出身。神戸海軍操練所時代からの龍馬の盟友で、共に亀山社中を設立。薩長同盟の際の立役者である。単独渡英が発覚し切腹。(国立国会図書館蔵)

### 長崎街道

長崎から小倉に至る五七里(約三四km)の街道は、日本国中へ中国や西洋の文化を運んだ大動脈。歴代長崎奉行やオランダ商館のカピタンたちはこの道を通って江戸へ参府しました。同行したドイツ人医師ケンペル、シーボルトも通り帰国してから日本に関する本を著し、海外で「不思議の国ニッポン」を紹介しています。そんな憧れの長崎を訪れた文人墨客、著名人は福沢諭吉、伊藤博文など数知れず。歩いたのは人だけではありません。八代將軍吉宗に献上された象は、役人や象使い(四人と共に街道を歩き、オランダ船でやつてきたヒトコブラクダの牡と牝も通っています。そのほかクジャクやオウムも街道を行列して江戸の將軍に献上されました。そのたびに街道沿



いの宿場町には見物人が押しかけました。海の彼方から貿易船で運ばれてきた文物は、街道の二・五の宿場町でおいしい銘菓をつぎに誕生させ、いまではシュガーロードと呼ばれる甘い道でもあります。



「蘭船碇泊図」(川原慶賀「唐蘭館絵巻」長崎歴史文化博物館蔵)



シーボルト (1796~1866)

長崎オランダ商館医師で植物学者。私塾「鳴滝塾」を開き西洋医学や自然科学を教授。文政9年の江戸参府にお抱え絵師の川原慶賀を同伴。街道沿いの風景や植物などの写生をさせ、のちに「日本」「日本植物誌」を著す。禁制の地図などを国外に持ち出そうとして、日本追放。娘・楠本イネは日本最初の産婦人科医。「シーボルト」(川原慶賀「唐蘭館絵巻」長崎歴史文化博物館蔵)



「阿蘭陀船持渡礼象」(神戸市立博物館蔵)

### 江戸の道中事情

#### 通行手形はパスポート

旅に出ることが決まったら、まず通行手形の申請をします。武士は藩庁、庶民は町(村)役人が権那寺に申し出て、身元保証、旅の目的、旅程などを記入し、役人が発行します。宿泊にも必要なので、旅の間は要携帯。問所や番所は交通の要所や藩境などに設置され、番人が通行人や荷物などの検査・徴税をおこないます。通行人はここで手形を提示し、番人が内容や押判の真贋を確認します。いまの通関手続きですね。



#### 身支度

旅には草鞋(わらじ)、脚絆(きゃはこ)、股引(ももひき)、手甲(てこう)、羽織、着物、合羽(あひら)、陣笠、矢立、扇子、糸、懐中鏡、日記帳、櫛、髪付ひんつげ油、提灯(ちようちん)、ろうそく、火打道具、懐中付け木、麻綱(あしな)かきなどを準備し、これらをコンパクトにまとめ、振分荷物にします。



#### 足が疲れたら

一日平均二〇〜四〇キロほど歩きますから、よい草鞋を柔らかくして、紐はきつすぎず緩すぎず締めることが大切。足が熱を持つので、ときどき草鞋のひもを解いて熱を冷めます。茶屋で休むときは草鞋をぬぎ、縁台などの上へあがり、ちゃんとした姿勢で休むこと。宿に着いたら、足の三里(さんり)、承山(しょうざん)を、通合(つうご)の三方(さんぱう)に灸をすえ、特(とく)にたくたびれたときは、入浴後、洗脚(せんきゃく)を足の三里より下、足の裏まで吹きつけましょう。足が痛むときは、入浴後足の裏へ塩をたらぶりなすりつけて火あぶると効果抜群です。



#### 道中の安全対策

山道などを歩く時は、牛の糞を草鞋の裏へぬつておきましょう。けものや蛇、まむし、毒虫などは、恐れて近づかないと言われています。また、夜道では熊や狼に襲われることがあるので、山中や人里遠い野原では竹杖(たけぼうし)で道をたいて音を立てて歩くこと。火縄(ひなわ)や松明(しょうめい)などを持って歩けば安心です。できれば夕方までには宿場に着くように歩きましょう。





島原藩は譜代大名だったので、当然佐幕派で二度にわたる長州征伐にも出兵しました。しかし、国内は尊王倒幕へ動きつつあり、特に近隣諸藩は倒幕派が多かったのです。

幼い藩主にとって島原藩のかじ取りは難しく、病床に伏せることもありました。

やっど、慶応四年（一八六八）初め、朝廷に忠誠を誓い、やがて奥州征伐を命じられ一応面目を立てました。



島原藩最後の藩主 松平忠和

こんなお国柄だった

大手門前を過ぎ、街道はお城を左に見ながら城下町を通り抜けます。このとき龍馬が見上げた天守閣の主は、第十三代藩主松平忠和。御年弱冠十四歳。水戸藩主徳川斉昭の十六男で、兄は第十五代將軍徳川慶喜。前島原藩主の急死により養子となり二二歳のとき藩主になりました。

こんなお国柄だった



東空岡(古賀)風跡



流死菩提養塔

島原城下から神代鍋島へ



この階段から 旅路は始まった がじょ。

島原湊 島原湊の船着場には当時の石段が今も残っています。

流死菩提養塔

寺中城跡

茶華園跡

龍馬がやってきた！

元治元年（一八六四）二月三日早朝、海舟と龍馬らは島原への第歩を、島原湊の石段に標しました。ここ島原内港は古くからの船着場で、とくに明治期になると三池坑の石炭積出港として賑わいました。港には石組の岸壁や白壁の蔵が点在し往時を偲ばせてくれます。港口に浮かぶ風光明媚な九十九島は、雲仙噴火にともなう眉山大崩壊（島原大変）によってできたものです。

龍馬の軌跡をたどる 島原



流死菩提養塔

島原城

武家屋敷

大手門

中村家本陣跡

島原湊



屋敷門は 当時のまままじゅう。

移築された中村家屋敷門 (島原市萩原一丁目)

まずは城下でひと休み

島原湊から上陸後二行は島原城下の本陣である中村家別当屋敷でしばらく休憩しました。その屋敷はすでになく、門だけが別の場所に移築されて現存します。木造瓦葺入母屋造で両脇に用人部屋を備えた風格のある構えです。帰路はここで一泊。この門を龍馬たちは出入りしたのです。

島原大変肥後迷惑

街道は城下を抜け、海岸沿いに北へ伸びていきます。海に出会って、ほどなく「流死菩提養塔」があります。この北目道沿いには多くの流死菩提養塔が見られます。それは島原大變の遭難者を祀ったものです。



島原大變図 眉山の崩壊で城下町の3分の2が壊滅した状況がわかります。(肥前島原松平文庫所蔵)

寛政四年（一七九二）雲仙岳の大噴火によって眉山が大崩壊し、大津波が発生。対岸の熊本（肥後）をはじめ有明海沿岸全域に押し寄せ、一万五千人を超える犠牲者を出した大災害です。「島原大變肥後迷惑」という里諺で後世に伝えられてきました。街道を往来する人びとも、足を止め手を合わせ、その無念を弔ったに違いありません。



島原城 島原城は元和4年(1618)から松倉重政が約七年の歳月と多くの労力を費やして築いた城。再建された天守閣は郷土資料館になっています。別名、森岳城。TEL.0957-62-4766



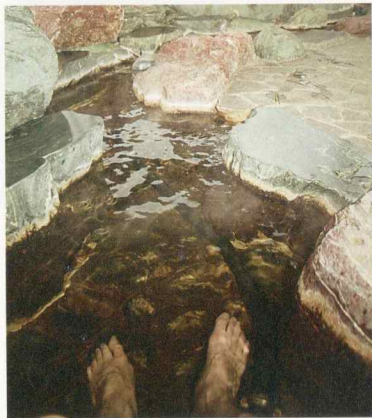
島原武家屋敷通り 島原武家屋敷通りには3軒の武家屋敷が公開されており、城下町の佇まいを色濃く残しています。この辺りは、島原街道千々石道になります。

明け方、波静かな有明海の船上から眺めた雲仙嶽は、その裾野を大きくひろげ、それはとても美しかった。ワシらは島原の城下を抜け、雲仙嶽を左に仰ぎ見ながらなだらかな丘陵を北へすすんだ。島原街道北目道である。道は極めて悪く、転がる石ころを指して、海舟先生は「フアミツてある」とおっしゃった。亞米利加語で溶岩のことであるらしい。さすがに洋行帰りはインテリである。それにしても島原の水は旨かった！

ゼヨ。







街道沿いにある有明福祉センター「美人の湯」の附属施設に、無料の足湯(単純泉)があります。歩き疲れたら気軽にどうぞ。 TEL.0957-68-3466

江戸から昭和初期まで、この一帯ではほとんどの家庭で島原木綿が織られていました。殿様にも献上された名品で、街道をゆく旅人にも、カタン、カタンと機械織りの音が聞こえてきたことでしょう。今では島原木綿保存会によって伝統技術が継承されています。島原木綿は有明民俗資料館で見ることができます。

江戸から昭和初期まで、この一帯ではほとんどの家庭で島原木綿が織られていました。殿様にも献上された名品で、街道をゆく旅人にも、カタン、カタンと機械織りの音が聞こえてきたことでしょう。今では島原木綿保存会によって伝統技術が継承されています。島原木綿は有明民俗資料館で見ることができます。

校舎は村の中央の高台にあつて校庭に出ると雲仙嶽の巨大な姿が目の前にありました。教室は校庭に繁った棕櫚や枇杷の葉影を通して、有明湾からソノソノとした風が吹き入れ涼しく、晴れた日は海を隔てて肥後の山山が近くクツキリと見えその岸を大牟田へ通う小さい汽船が煙を吐いてゆくののです。



和蠟燭は微妙な炎の揺らぎと香りが特長です。

かつて製蠟業は島原の基幹産業でした。藩は島原大変によつて逼迫した財政を復興するため蠟の木を栽培を奨励しました。明治のはじめ島原半島に約二四〇軒あつた木蠟所は、現在わずか二軒。全国でも数えるほどになりました。伝統を絶やさないで、今でも月に数日、レトロな機械を稼働させ蠟を搾っています。

### 和蠟燭と天才作家と島原木綿

街道は島原鉄道「大三東」を過ぎた辺りから内陸部へ入っていきます。緩やかな起伏の丘陵を幾つも越え、小さな集落を通り抜けながら、街道は西をめざします。そんな集落の一つに本多木蠟所があります。かつて製蠟業は島原の基幹産業でした。藩は島原大変によつて逼迫した財政を復興するため蠟の木を栽培を奨励しました。明治のはじめ島原半島に約二四〇軒あつた木蠟所は、現在わずか二軒。全国でも数えるほどになりました。伝統を絶やさないで、今でも月に数日、レトロな機械を稼働させ蠟を搾っています。

# 島原街道 歴史に刻まれた歴史をたどる

## 古代からの歴史の道



街道から離れた大野浜には日本で唯一のユニークな鱷(ボラ)供養塔があります。明治14年1月、石干見(スキ)に溢れんばかりのボラの大漁(140トン)で一獲千金を得た漁師が供養のために建てたものです。土台は石干見の丸石を使用。



島原木綿 島原木綿は藍染糸を地色に地味で素朴な風合いが魅力。厚く打ち込まれているため丈夫です。島原木綿保存会(有明公民館) TEL.0957-68-1101



『感性の絵巻・仲町貞子』(田中俊廣著 長崎新聞社) 短編12篇を収めた仲町貞子入門書です。1000円



仲町貞子(1894-1966) 短編の名手として珠玉の作品を残しています。



蒸しあがった種の実を玉絞式搾機にかけるとドロリとした餡色の蠟が流れ出てきます。敷地内には種(はぜ)資料館も併設。 本多木蠟工業所 TEL.0957-68-2684



松崎の大楠 樹高30m、幹周り13m、長崎県最大の巨樹。



景花園跡 大石は弥生中期の支石墓で、下からは銅剣二本が出土しました。



龍造寺隆信(1529~84) 「肥前の熊」と呼ばれた大名で、沖田畷の戦で壮絶な最後を遂げました。(佐賀県立博物館所蔵)



湯江川沿いの島原街道



城下町をゆく島原街道

島原街道は湯江川を渡り、往時の街道風情を色濃くのこす温泉屋敷の丘陵を縫いながら、栗谷川を渡ると現代の藩境。雲仙市に入ります。



温泉屋敷付近の島原街道。背後に平成新山が迫ります。



島原街道に面した加藤酒造場の母屋。明治初期の建物です。 加藤覚氏 TEL.0957-68-0001



加藤酒造場 千石蔵や米蔵は大正時代に筑後から移築したものです。

造り酒屋のつくる風景 かつて街道沿いには村ごとに造り酒屋がありました。米どころ、水どころの島原には、旨い地酒が多くありました。その二つ、アサヒノボルと書かれた煉瓦造の煙突がランドマークの加藤酒造場があります。創業明治一〇年の巨大な千石蔵や米蔵、門など酒造場は街道を挟んで建つ母屋とともに長崎県「まちづくり景観資産」に登録されています。



また『ラアミ』が噴き出した！  
 旧暦元治元年二月三日は、新暦なら三月の半ば。龍馬が朝霧けむる島原湊に降り立ってから約一世紀半。龍馬が歩いた島原街道北目道には、並行して島原鉄道が通り、日がかりだった愛野までを、わずか二時間ほどで走り抜けられます。島原は江戸時代の初め松倉重政が城を築き、島原藩の城下町として栄えました。『島原の乱』や『島原大變』など、過酷な歴史を負いながらも、そのたびに力強く復興してきました。いまでも白亜の島原城を中心に、城下町の風情を色濃く残し、至る所に湧き出す清水が、その歴史に潤いを添えています。雲仙岳の裾野には、自然公園や遺跡が点在し、古くから続く人びとの営みが、伝統的な工芸や文化を伝えていきます。龍馬はそんな島原を通り過ぎてゆきました。街道は『海舟日記』の記す『ラアミ(溶岩)』の悪路です。そして平成二年一月一七日、普賢岳の大噴火。六年にわたる火山活動は、島原に大きなダメージを与えました。しかし太古の昔から人は火山と共生してきたのです。考えてみれば、豊かな湧水も温泉も、そして肥沃な大地も、美しい自然や風土、人びとの暮らしや文化も、すべてが雲仙岳の恵みなのです。そんな環境が平成二十二年に日本初の大地の公園「世界ジオパーク」に認定されました。ダイナミックな自然と人の営みを訪ねながら、人びとの優しさにふれ、地球の息吹を体感する旅を、是非、どうぞ。



平成新山  
 平成2年からの普賢岳噴火にともない誕生した平成新山。標高1483mで、長崎県の最高峰になりました。



舞岳ふれあいロード  
 舞岳山荘から山頂まで、およそ3kmの遊歩道は、間伐材などを利用した八八八八の階段で、平成八年八月八日午前八時の開通。完歩できたらラッキーで天晴れです。



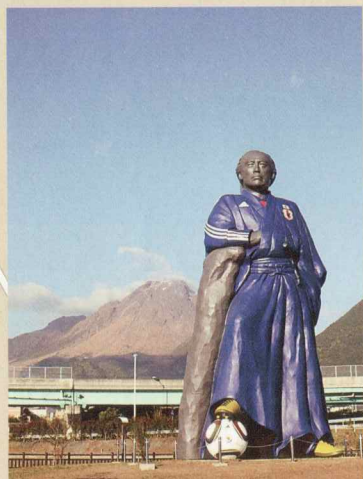
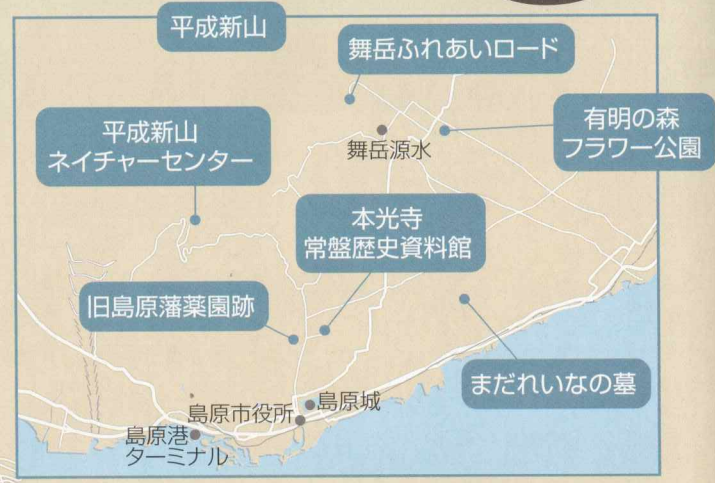
平成新山ネイチャーセンター  
 平成新山を仰ぐ絶好のビューポイントです。噴火で荒廃した台地上にあり環境変化の驚異をライブで実感。火山の歴史やメカニズムなど展示解説しています。  
 TEL.0957-63-6752



有明の森フラワー公園  
 舞岳の広大な山麓に、四季折々に鮮やかな花の絨毯が現れます。借景は雲峰雲仙の山々。ふるさと物産館も人気です。  
 TEL.0957-68-5252



あれから  
 一世紀と半分  
 島原



サムライブルー龍馬像  
 サッカー日本代表を応援するため造られた巨大龍馬像。東京から島原復興アリーナに参上。「がまださんばゼヨ」島原のシンボルになりました。身長10m。



島原温泉  
 源泉は市内三カ所。そのうち元池第二源泉は泉温41度、日量53トン、炭酸水素塩泉で、無色透明、肌に優しい温泉です。市内には足湯2カ所、飲泉所7カ所、日帰り温泉も楽しめます。



島原湧水群  
 市内には60カ所を超える湧水スポットがあります。こんこんと湧き出る清水は、人びとの暮らしを潤し、町中を巡りながら「水の都」の風情を演出します。水屋敷や水路、共同水場など、島原ならではの光景です。



雲仙岳災害記念館  
 愛称「がまだすドーム」火山体験学習施設です。火山噴火の脅威と人間の英知を、博物館的展示とハイテクを駆使したバーチャル体験で伝えます。  
 TEL.0957-65-5555



サムライブルー龍馬像



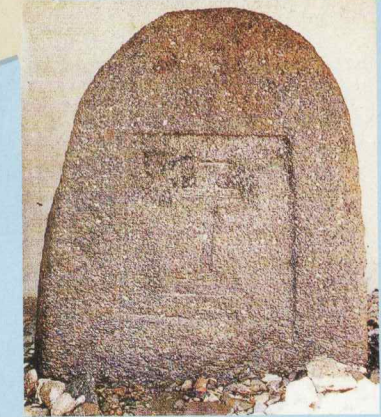
本光寺  
 元禄2年(1689)開山。島原松平家の菩提寺。藩主の墓地や十六羅漢窟のほか、島原城内から移築した常盤御殿は、歴史資料館として松平家コレクションを誇ります。  
 TEL.0957-62-3382



旧島原藩薬園跡  
 嘉永6年(1853)完成の藩薬園跡。石垣や貯蔵穴など大規模な遺構で国指定史跡。日本三大薬草園のひとつ。



涅槃像(江東寺)  
 島原城を築いた松倉重政と、「島原の乱」で戦死した幕府軍総帥・板倉重昌を追善供養するため昭和32年に建立されました。全身8.6m。



まだれいな墓  
 小さな安山岩の自然石に、十字架と「まだれいな」のクリスチャンネームを刻んだキリシタン墓碑。山寺の共同墓地に奇跡的に残っていました。





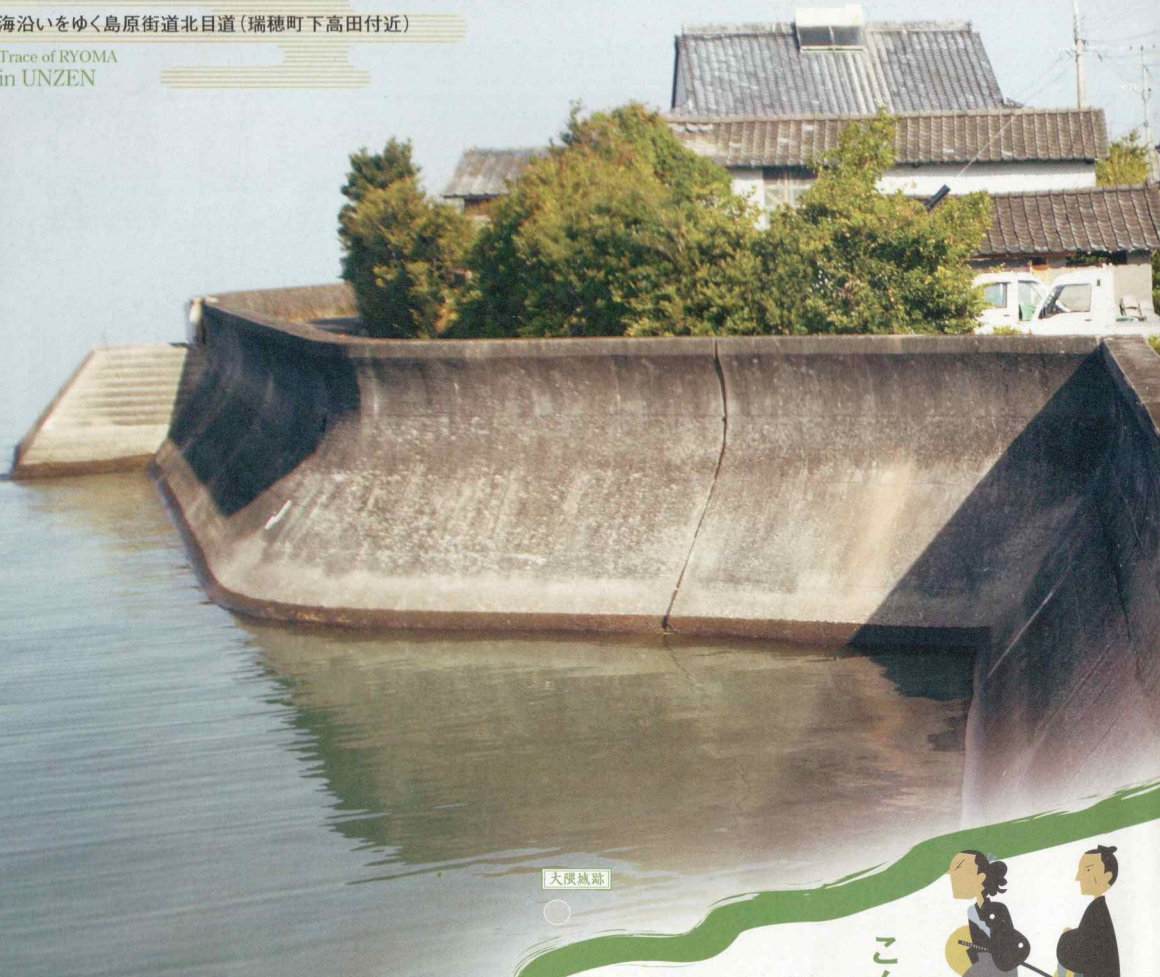
**神代小路**  
領主鍋島氏の陣屋であった鍋島邸を中心に、当時の区割のままに、石垣や矢竹の生垣、水路、藁葺屋根の武家屋敷など、静かに江戸の面影を伝えています。懐かしい木造の校舎を改修した歴史資料館「国見展示館」もあります。  
TEL.0957-78-2334



**鍋島邸**  
鍋島邸は元禄期の豪大な建物に近代のモダンが加わって、威厳と洒脱を兼ね備えています。広さ3000㎡の枯山水の庭園は裏山の鶴亀城跡まで続き、しだれ梅やツツジ、緑葉桜など庭木も四季を彩ります。国指定重要文化財。  
TEL.0957-61-7778



**鍋島家墓地**  
街道沿いに鍋島家の菩提寺、常春寺があります。境内には歴代領主の墓地があります。



**こんなお国柄だった**  
札元の四ツ辻を直進し倉地川を渡ると、いよいよ神代鍋島領です。かつて橋の袂には島原藩との領境を標す境目石が立っていました。

神代は、天正一五年(一五八七)豊臣秀吉の九州国割で佐賀藩鍋島直茂に安堵され佐賀領の飛び地となりました。慶長一三年(一六〇八)に直茂の兄信房の所領となり、以後、神代鍋島家と称し明治の版籍奉還まで続きました。石高四一〇石、二百三十余名の家臣を従えた小領主です。海舟らが訪れた幕末、領主に就いたのは第十五代茂文でした。財政は逼迫し、嘉永二年(一八四九)の負債総額は七二二〇両に達していました。そのため神代領では節約励行、家臣も林業や養蚕業など自給自足の経済政策をとっていました。そのため維新後、士族が解体されても、ほとんどの家臣が離散することなく、奇蹟のような町並みを今に留めることができました。まるで江戸時代にタイムスリップしたような神代小路の佇まいは、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

島原街道は鍋島陣屋の城下町神代小路を避け迂回します。神代鍋島家の四月二十日付「鍋島日記」に次のような記載があります。「公役人長崎江御用筋三而罷越候段(中略)神代江休之由二付町内休所割付手当相成候事」海舟一行は神代鍋島家の計らいで、街道をはずれ、神代小路で休憩をとったようです。



**神代鍋島日記**  
神代鍋島日記には「御軍艦奉行並 勝麟太郎 上下式拾人」とも記されています。海舟の配下20人の中に龍馬もいました。(長崎歴史文化博物館所蔵)



**運三の石窯パン**  
街道近くにある評判のパン工房運三。石窯で丁寧に焼かれた天然酵母パンは品数豊富。街道歩きにいかが。  
TEL.0957-78-1784



**境目石**  
「従是西佐嘉領」と刻まれた境目石。神代鍋島邸庭園に移されています。



**鳥刺し踊り**  
神代自慢の伝統芸能「鳥刺し踊り」は、今から約260年前、八代領主鍋島茂興が上洛した際に、同行の家臣が習い覚えてきたのが始まりです。祝儀芸の一つで結婚式など祝いの宴で披露されてきました。赤褌を十字に巻き付けて、豆紋りの手ぬぐいで頬被りした怪し気な男衆の踊りは、滑稽で軽妙。一度見たら忘れられない、今や全国区の人気です。  
(撮影ちばあきお) 神代陣屋



# 神代 鍋島から愛津村へ

さらに街道は支流を渡り札元の四ツ辻に差し掛かります。かつてここは高札場で島原藩多比良村番所が置かれていました。ここを北へ折れると二kmほどで多比良港の殿様船屋に着きます。藩主の島原入部や参勤交代のルートでした。北目筋多比良村番所「晴雨日記」元治元年二月十二日の頁には、「晴天、御公役が神代を通つた」と記されています。御公役とは軍艦奉行並勝海舟のこと。そこには随行の坂本龍馬の姿もありました。さらに一行の帰路、四月五日の頁にも同様の記載があります。ちなみにその日は曇天でした。



**多比良ガネ**  
多比良港はタイラガネと呼ばれるワタリガニの水揚げで有名。全国にファンがいます。



**晴雨日記**  
二月廿二日には「晴天 御公役今朝六時半時 湊船 公役今御通立 神代通 愛津村御泊」と記されています。(慶応義塾大学文学部古文書室所蔵)



**殿様船屋**  
殿様船屋があった須の崎港。殿様は御用船でここから肥後長洲の間を往来しました。

# 龍馬の軌跡をたどる 雲仙

「風ころ神代鍋島陣屋に到着した。質実剛健、「業隠れ」武士道の気品あふれる界隈はワシ好みであった。そこからは長閑な海沿いの道を愛津まで辿つた。春の干潟は潮干狩りを楽しそう。それにしても抱腹絶倒、「鳥刺し踊り」は愉快だった。  
ぜよ。





# 龍馬の軌跡をたどる

## 海に沿って歴史の道を

高原街道北目道は、神代を過ぎ海沿いに進むと、ふたたび高原領に入ります。ここ西郷の八幡神社には、頼徳碑があつて原口要の業績にふれています。彼は日本で最初の工学博士で鉄道のパイオニア。嘉永四年（一八五二）の生まれですから、龍馬がこの地を歩いた時は、まだ二三歳の少年でした。近代日本を導いた龍馬、近代日本を築いた要、ドラマチックな接近です。

街道は干潟に海苔ひびの立つ牧歌的な海岸線に沿って伸びてゆきます。海に向こうには多良岳も見えてきます。街道は吾妻町あたりから内陸部に入りますが、ここもかつての海岸線。江戸時代から干拓によって、干潟を埋め立てて広大な田畑が造成されてきました。

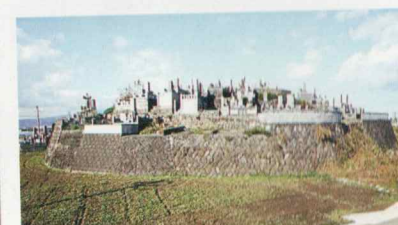
阿母崎を過ぎ、千鳥川沿いに遡り、橋を渡ると野井地区です。川端には造り酒屋があり、漆喰塀や石垣が続く街道には、由緒ある寺院や格子窓の商家、豪農の屋敷門が並ぶ。北目道随一の歴史薫るロケーションです。通りの外れには、海舟二行が長崎から帰路、投宿したといわれる野井村庄屋跡中尾家があります。



**原口要 (1851-1927)**  
原口要は文部省の第1回留学生として渡米。日本の鉄道3200kmを敷設。島原鉄道開通にも尽力しました。



**海が間近な島鉄「古部」駅**  
島原鉄道は北目道と並行して走ります。



**守山大塚古墳**  
島原半島唯一の現存する前方後円墳。先祖代々墓地として祀られてきたためユニークな姿で原形を保っています。



**あい娘酒造**  
昔ながらの手作りで生まれた銘酒「あい娘」と先代の山崎雄彦氏。TEL.0957-36-0025



**光西寺**  
門前に「感恩報謝」碑が立つ光西寺。江戸初期創建の由緒ある寺です。



**野井村庄屋跡**  
野井村庄屋だった中尾家は集落入口左側。石の門柱や屋敷材が名残を留めます。



**愛津庄屋宅跡**  
豪壮な石垣と京風庭園が残っています。

ここから高原街道はロマンチックスポット島鉄「愛野駅」前を通り、いよいよ北目道の終着点、土居口番所跡に到着します。島原城大手門から三キロメートル。「海舟日記」にみえる「島原 会津 八里」です。その日、海舟と龍馬らは愛津村庄屋深浦家に泊まりました。



**野井地区全景**  
集落を貫く街道は、往時の風情を色濃く残す歴史の道です。



**首塚**  
島原街道西目道の原口番所跡近くに直径10mの円墳があります。6〜7世紀の古墳とみられ、「島原の乱」キリシタンの首級を埋めたとか諸説あります。



**愛の駅(愛の記念きっぷ)**  
駅舎の屋根にはキューピットの矢。愛野から吾妻ゆき片道切符は「愛しのわが妻」。片道切符がたった最優認定証は250円。

# 温泉ハ 今モ昔モ 心アタタカ



**雲仙地獄**  
寛永4年(1627)から始まった弾圧で多くのキリシタンが殉教しました。それから10年後、島原の乱が勃発します。



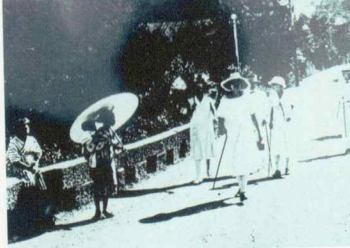
**満明寺**  
大宝元年(701)行基創建といわれ、比叡山、高野山と共に、日本の真言宗三大寺といわれた名刹。同時に四面宮(温泉神社)も祀られました。



**小地獄温泉**  
享保14年(1731)開湯。吉田松陰も訪れた雲仙随一の湧り湯です。TEL.0957-73-2351



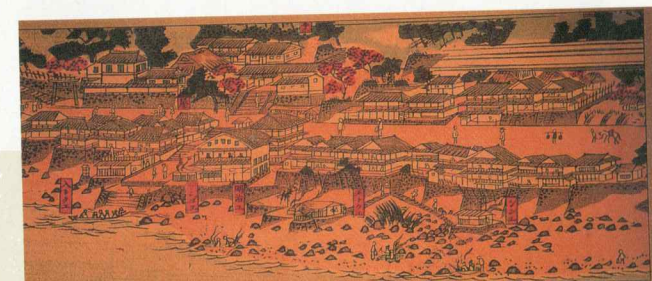
**雲仙観光ホテル**  
昭和10年(1935)創業。外貨獲得の国策で建てられた瀟洒な山小屋風ホテルです。国の近代化産業遺産。TEL.0957-73-3263



大正時代のリゾート雲仙



**雲仙ゴルフ場**  
大正2年(1912)オープンした日本最古のパブリックコースゴルフ場。TEL.0957-73-3368



江戸時代、海岸ではかけ流しの露天風呂を楽しみました。(小浜町歴史資料館所蔵)



湯煎餅のパッケージ

小浜は慶長(一六四四)湯太夫が海岸を埋め立て湯小屋をオープンしてから、本格湯治場としてデビューしました。幕末には木賃宿が三軒、島原の農民たちが賑わっていました。

シールボルトも著書「ニッポン」で「病を癒す効力ありとして名ある温泉あり。」その効能に興味をもち温泉を分析しています。むかしからこの湯治場では、男も女も、農民も武将も、兵隊も文人墨客も、西洋人もアジア人も、ゆつたり湯に浸り、のんびり時を過ごしてきました。大正時代に定期船が就航し、昭和の初めには鉄道も敷設され賑わいを増しました。

# OBAMA



**湯太夫屋敷**  
湯太夫とは温泉を管理する代官のこと。門は島原城二ノ丸御門を移築しました。歴史資料館を併設。TEL.0957-75-0858



**伝明寺**  
伝明寺にある入徳翁碑は、江戸の初め、中国僧で漢方医でもあった入徳師が温泉の効能を世に知らしめたことを顕彰したものです。



**島原街道西目道**  
温泉街の裏通りは、島原半島をひと回りする島原往還の殿様道でした。



大正時代の湯治場小浜



# あれから 一世紀と半分

雲仙



**岩戸溪流公園**  
水源の森から湧き出す清水は田内川水系の源流です。森を一周する散策路も整備。初夏には螢が神秘的です。



**百花台公園**  
雲仙岳を背景に広大な緑が広がる公園。子どもに人気のターザンの森はアスレチック遊具も充実。芝生広場で裸足になれば大地のエネルギーがもらえそう。テニス、サッカー、野球などのスポーツ施設も完備。展望広場からは遠く有明海が一望できます。



**岳棚田**  
日本棚田百選に選ばれている石積みの棚田。雲仙へと続く道の途中には棚田展望台もあります。棚田米も人気です。



**田代原(たしろばら)**  
田代原高原は裏雲仙の箱庭。九千部(くせんぶ)岳と吾妻岳に囲まれた牧場で、キャンプ場やトレイルセンターがあります。四季折々の自然観察ができます。



**雲仙温泉**  
日本初の国立公園。大小30からなる雲仙地獄はクリシタン殉教の舞台になった所でもあります。泉質は硫黄泉。源泉によって白濁、透明、クリーム色などさまざま。気軽に楽しめる足湯や指湯も人気のスポット。



## お山まるごと国際リゾート!

旧暦元治元年二月二三日、新暦なら三月の半ば。龍馬が爽やかな潮風を肌感じながら有明海沿岸の街道を歩いてから約一世紀半。お山雲仙はハイグレードな観光地になりました。明治期からは国際リゾートとして俄然脚光を浴び、混浴が当たり前だった温泉に、人用箱風呂「洋人風呂」を備えた外国人専用ホテルが立ち並び、多国籍の人びとが、のんびり時を過ごす高原避暑地でした。

インフラが整備され、日本初のゴルフ場やテニスコートができる、全国から観光客が訪れるようになりました。歌人の斎藤茂吉や吉井勇、詩人の北原白秋、インドの詩人タゴールも雲仙温泉にご宿泊。リゾートステイは、文人たちにとってどんなインスピレーションを与えたのでしょうか。昭和二年には国立公園第一号に指定。「東の富士山、西の雲仙」と横綱級の名山になりました。山懐には雲仙の豊かな自然を利用した個人的な公園も点在して、休日は家族連れで賑わいます。

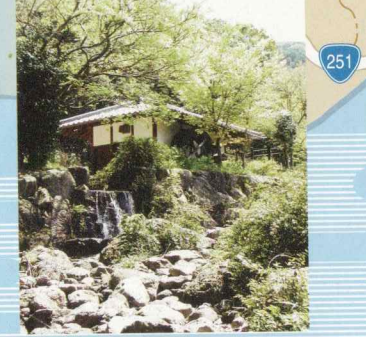
雲仙岳のなだらかな裾野には、明治初期から栽培が始まったジャガイモ畑が広がっています。いま地元ではジャガイモがテーマのスイーツ色。雲仙のジャガイモは、もはや野菜を超えておいしく進化中です。橘湾産「エタリ塩辛」と「雲仙こぶ高菜」が、食の世界遺産にも認定されました。雲仙は今も昔も豊かです。雄大な自然とたつぷりの湯。雲仙の洒落た大人のゆとりに浸る旅を、是非、どうぞ。



**千々石(ちぢわ)断層**  
愛野展望台の下に切り立つ落差100mの断崖。島原半島内で最も明瞭な断層地形で島原半島ジオパークの主要サイトのひとつ。



**牧場(まさば)の里あづま**  
吾妻岳の中腹に広がる吾妻岳牧野を利用した休養地。尾根伝いに万里の長城を模した全長480mの遊歩道があり、有明海や橘湾、遠く雲仙の山並みなどが眺望できます。



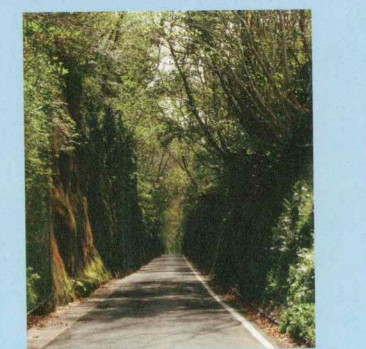
**農村公園水車の郷(さと)**  
瑞穂町に流れる西郷川のほとりに整備された、溪流と親む公園です。水車小屋は実際に地元の農家の方が精米などに使っています。美しい水と「農」のある風景に心癒されるでしょう。



**金浜眼鏡橋**  
殿様道沿いにある金浜川に架かる石橋。弘化3年(1846)北串山の地主岡右衛門が普請。現在の橋は1993年に復元されたもの。橋のたもとアコウの木と相まっていい風情です。



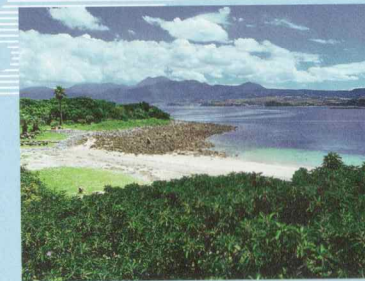
**六角井戸**  
弘法大師が六角の杖で大地を突くと水が湧き出し、住民を水不足から救ったという伝説の井戸。別名「弘法大師お助けの井戸」。集落唯一の水場であり社交場でもありました。



**小浜鉄道跡**  
戦前利用されていた諫早と小浜温泉とを結ぶ軽便鉄道の軌道敷跡。車道として利用され、狭いトンネルや緑の切り通しが、かつて鉄道であったことを教えてくれます。



**橘神社**  
祭神は軍神橘中佐。境内には中佐の銅像の他に、地元出身である天正遣欧少年使節・千々石ミゲルの像などもあります。境内を含む公園は桜の名所としても有名。



**国崎半島自然公園**  
橘湾に突き出た半島全域が県立自然公園に指定されています。自生する亜熱帯植物を観察するもよし、キャンプをするもよし、夏には海水浴、磯釣り、磯遊びなどマリッジも楽しめます。



**諏訪の池公園**  
国民休暇村の敷地内にある島原半島最大の灌漑用の池。池のまわりには1周5キロの自然歩道があり、ボート遊びやフナ釣りのほかキャンプも可。少し足をのばせば縄文時代の支石墓群・原山ドルメンがあります。



龍馬の軌跡をたどる

# 諫早



元治元年一月三日、晴れ。昨日は雲仙嶽を西に仰いで歩いた。今日は東に見える。お山を半分回ってきた勘定だ。紺碧の橘湾はお山を水面に写して、それは見事な景色だった。この海ではエタリという鰯がとれる。ワシは土佐の鰯が好物だが、漁師が漬け込んだエタリの塩辛は格別の旨さだった！

ゼヨ。

## 今ならハスも温泉も

愛津村庄屋、深浦家を出発した海舟一行は、すぐに佐嘉藩諫早領に入ります。街道は橘湾沿いに西へと続きます。まずは唐比湿地公園。湿原に広がるのはハス園。花の見頃は初夏。夜明けとともに花を開きます。

龍馬がここを通ってから三年後、慶応三年（一八六七）『諫早日記』に「唐比温泉湯坪調査」に関する記述があります。この辺りで温泉を掘り当てようとしていたようです。しかし唐比温泉が見つかったのは昭和四三年（一九六八）のことでした。またここは、水晶観音伝説の地でもあります。



唐比湿地公園 唐比湿地公園にある約2ヘクタールのハス池には十数種類のハスと睡蓮が栽培されています。見ごろは7月上旬。



水晶観音 「平安時代のおわり領主の姫・虎御前は、桶のくり舟もろとも唐比の池に沈んでしまった。それから500年後、池の底からくり舟に乗った水晶観音像が現れた」という伝説が残っています。高さ約30cmの観音像は補陀林寺に安置されています。



唐比温泉センター 唐比温泉センターの泉質は摂氏20度の弱塩温泉。TEL.0957-36-1046



れんこん掘り 唐比湿地地上層部10mは泥炭層で、鉄分を含む黒色の粘土状。そこで栽培される唐比れんこんは、もっちりとした食感と旨さ。収穫はすべて手掘りなので「幻の」と形容されます。

## 愛津から 矢上宿へ

### 橘湾を眺めながら

長崎へ、勝海舟一行は、なだらかな丘陵尾根道を急ぎます。このあたりには弥生後期から古墳時代の遺跡が点在しています。街道右手奥部に広がる低地は井牟田盆地。古代から水田が開かれ、人びとの暮らしが営まれてきたところです。

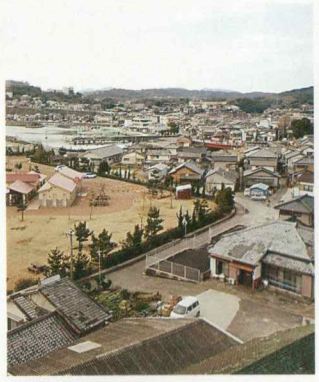
諫早へと続く有喜街道と、有喜港、江の浦へと続く島原街道の分岐点は「横山頭追分」と呼ばれています。二行は近道である島原街道を進んだと思われれます。有喜に向かつて次第に下りていく山道は、橘湾が見え隠れする街道屈指のビューポイントです。



みそ五郎どん岩 「みそ五郎どん岩」は追分手前にある路傍の巨石。島原半島には「みそ五郎どん」という大男伝説が数多く残っていますが、この岩に関する謂は不明。

橘湾の眺め 横山頭追分辺りからは美しい橘湾の景色が広がります。

街道はかつてイワシ漁で賑わった有喜の港町を縫うように抜けていきます。漁師町の入り組んだ家並と港近くには大きな恵比寿像。どこからか有喜名物の揚げかんばんの香りも漂ってきます。



有喜の港町 港町の風情を醸す有喜の町。橘湾で取れるイワシを使って、いりこや蒲鉾製造が盛んです。

### ポテト台地を歩いて

有喜から街道は緩やかに上り、橘湾を背に台地の頂きをめざします。台地上に辿り着くと、そこは二面に広がるジャガイモ畑。しかし龍馬が歩いた当時、日本ではジャガイモはまだ栽培されていませんでした。島原街道は、そこから峠をいくつか越え、矢上宿で長崎街道に合流します。



峠のコロッケ 国道251号沿いにある農産物直売所「フレッシュ251・2号店」の名物は、飯盛産ジャガイモだけで作った「峠のコロッケ」1個50円。TEL.0957-48-2242



江の浦・熊野神社の天井絵と絵馬 熊野神社拝殿の天井絵は179格の中に花卉、動物、人物、山水が描かれています。そして畳一畳ほどもある絵馬は「秀吉耐忍之図」と「西郷卜月照之図」の2枚。幕末、安政の大獄で追われた月照と西郷隆盛を描いたもの。市指定有形文化財。





御書院  
御書院の心字池に架かる太鼓橋や月見灯籠は当時のまま。



最後の諫早領主、諫早一学公  
(諫早市郷土館所蔵)

運動に加わっています。諫早は廃藩置県後もしばらくは佐賀県に属していました。

**こんなお国柄だった**  
江戸時代、諫早は佐賀藩の配下であり、佐賀鍋島の「御親類同格」にある諫早氏が領主を務めていました。佐賀藩の重臣でもあったため日頃は佐賀に在任。そのため諫早領の政治は諫早家の家老が務めました。本明川の氾濫や干拓による新田開発など、さまざまな問題は、そのつど佐賀まで出向き、領主の指示を仰いでいました。諫早最後の領主は、第十六代の諫早一学公。文久三年(八六三)に先代の諫早武春公が十六歳で没したため、急ぎよ叔父である一学公が後を継いだのです。一学公は本藩の佐賀藩に倣い尊王

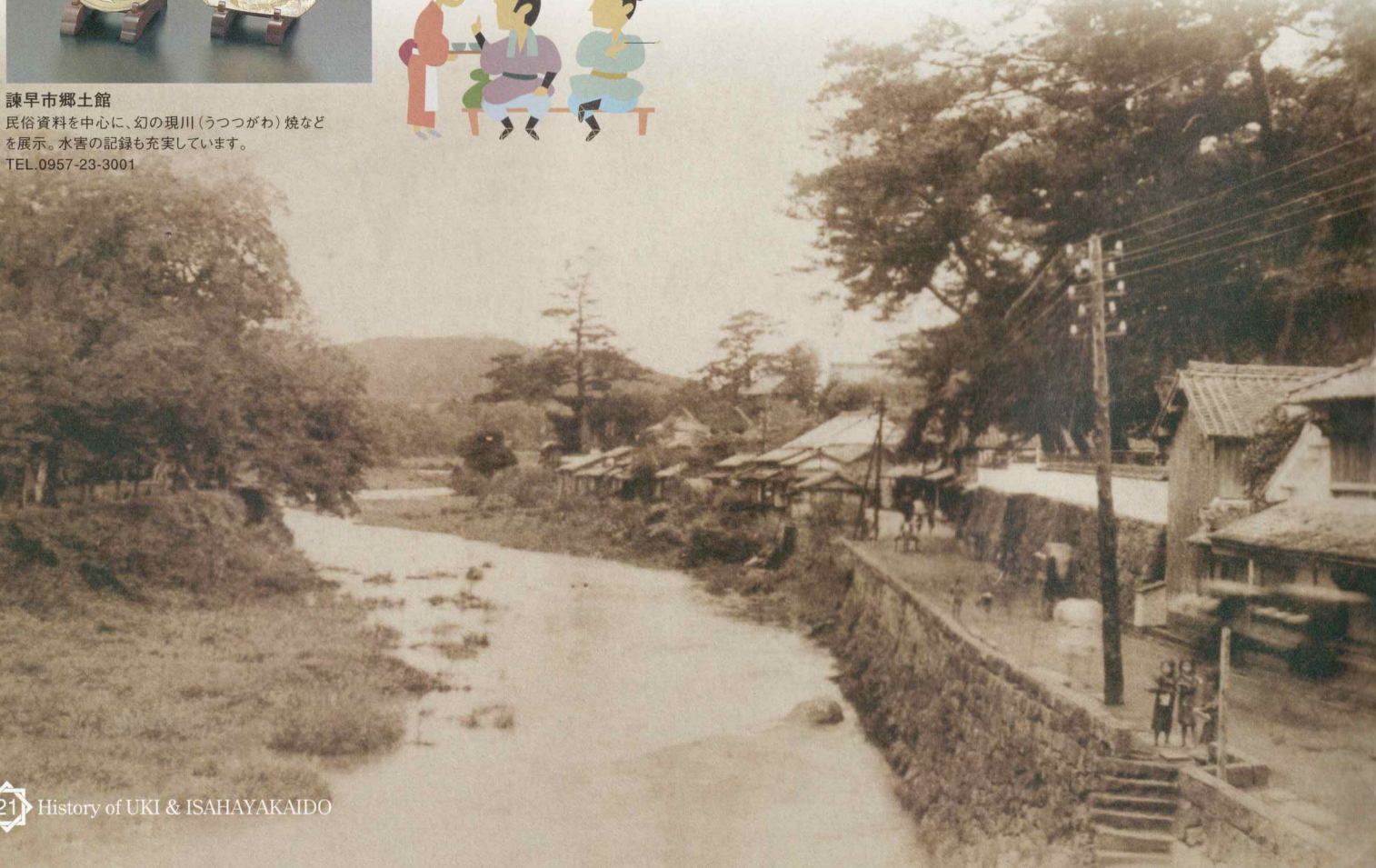


諫早公園(大クスの木)  
諫早公園全体が国指定天然記念物の諫早市城山暖地性樹叢。ツツジの名所にもなっています。



諫早市郷土館  
民俗資料を中心に、幻の現川(うつつがわ)焼などを展示。水害の記録も充実しています。  
TEL.0957-23-3001

**水が巡る城下町(疎水百選小野用水)**  
諫早の中心には市役所、高城公園、諫早公園周辺を一周する約一・三kmの高城回廊があり、水路が巡る情緒のある散策路となっています。戦国時代に築かれた高城の跡を整備した諫早公園には移築された眼鏡橋があり、諫早市民の憩いの場となっています。隣接する県立諫早高校の中にある日本庭園は「御書院」と呼ばれ、初代諫早領主龍造寺家晴公(のちの諫早氏)によって築造された屋敷跡。領主諫早氏の菩提寺の天祐寺には、初代龍造寺家晴公から十八代家興公までの墓があります。また維新後、男爵の位に就いていた諫早家の屋敷は、そのまま諫早市郷土館として利用されています。



西郷の板碑  
高さ2m、幅1.2m、厚さ7.5cmの砂岩の板石塔婆。「建久元年才次庚戌十一月日」(1190)の陰刻があり、県下の石造物の紀年銘では最古のものとみられています。

**城下町を巡る道**  
島原街道の追分から、有喜街道は雑木林の長い山道を抜け、諫早市街へと入ります。ここまでは約一km。埋津川を渡ると長崎街道への分岐、かつてはここに追分石がありました。そのまま進んで眼鏡橋を渡ると諫早街道に合流します。諫早街道は別名多良海道ともい、佐賀の塩田宿から諫早の永昌宿をつなぐ有明海沿岸の街道。佐賀に在任していた領主が通った殿様道です。



木秀一里塚  
この一里塚は有喜街道の一里塚。道の両側にある珍しいかたちです。

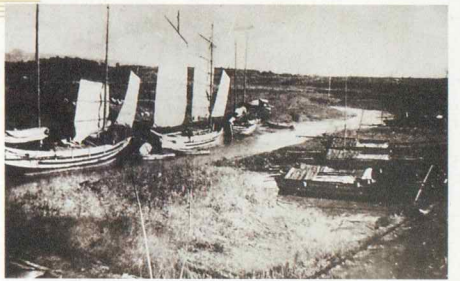


安徳天碑  
壇ノ浦の合戦で祖母の二位尼(にいのあま)と共に入水した安徳天皇が、生き延びて、この地で崩御されたと伝えられています。地元の人びとの手によって祀られています。ここから500m程離れた林の中には、地元で「ばんば(お婆)さん」と呼ばれている二位尼碑があります。



多良海道沿いにある慶嚴寺は箏曲「六段の調」を作曲した八橋稔校が修業した寺で、諫早家の家室として伝わる増田明珍作の鑑書が納められています。

**有喜街道**  
に刻まれた歴史をたどる  
龍馬の道からはずれて、有喜街道の殿様道を辿って諫早の町を訪ねてみました。島原藩主が江戸へ赴く時は横山頭追分から諫早經由の道を通っていきました。



仲沖船着場  
帆掛け舟と手漕ぎ舟。江戸時代、光江津(現在の仲沖)は長崎と諸藩を結ぶ海路で、軍船、商船、漁船などが頻繁に出入りして、舟改め番所もありました。満潮時には船が眼鏡橋まで本明川を遊んできました。(昭和5年撮影)



有喜街道を諫早城下へ



本明川に架かる眼鏡橋  
水害直前の眼鏡橋(昭和32年撮影)。天保10年(1839)に当時の領主、領民が永久不壊の願いを込めて本明川に架けた石造りのアーチ橋。昭和32年の諫早水害後に諫早公園内に移築されました。石橋としては日本初の国指定重要文化財。橋の奥に見えるのは安勝寺。眼鏡橋までは有喜街道、橋を渡って川沿いの道が多良海道。



# あれから 一世紀と半分

諫早



有明海  
(諫早湾)



山茶花(さざんか)高原ピクニックパーク  
多良岳山麓にあり、山茶花高原ハーブ園も隣接。ピクニックパークは無料で遊具施設も充実。ハーブ園は入園料300円(1年間有効)。  
TEL.0957-34-4333

雲仙多良シーライン  
(諫早湾干拓堤防道路)



干拓の里  
干拓の歴史を紹介する干拓資料館、本明川や有明海の生物を飼育展示しているむつごろう水族館、市指定文化財の庄屋屋敷、馬車公園・遊具などの施設があります。  
TEL.0957-24-6776



轟(とどろき)峡  
落差12mの轟の滝など大小30余りの名滝を連ねる県下有数の清流。上流部には湧水の水汲み場もあります。周囲にひろがる轟の森林も「水源の森百選」に指定されています。写真は楊柳の滝、高さ33m。



雲仙多良シーライン  
まっすぐに延びる約8kmの干拓堤防道路。中間地点に設置された展望歩道橋に立てば、両側に有明海といさはや新池(調整池)、前後に雲仙と多良の山々を眺めることができます。

## 水と干拓のパイオニア!

旧暦元治元年二月三日は、新暦なら三月の半ば。龍馬が春がすみに煙る雲仙嶽を橋湾越しに眺めながら諫早領を歩いてから約一世紀半。  
諫早はユニークな三つの海に囲まれています。一つ目の橋湾は太古の昔、海底のマグマが地表に噴出した際に陥没してできた珍しいカルデラの海。千々石断層とともにダイナミックな地球の営みを感じることが出来る風景です。有喜港は橋湾でアジ、イワシを捕るまき網船団の拠点でもあります。

諫早の北部に聳える多良岳は、じつは雲仙岳よりも古い火山。長く美しく広がる裾野に諫早の街はあります。街の中を流れる本明川は多良山系を源流とし、ひとたび大雨が降るとたちまち濁流渦巻く「暴れ川」となります。江戸の昔から現代まで、ときに尊い人命を犠牲に、諫早の人びとは川と共に暮らしながら美しい町を造りました。本明川の水が還つてゆくのは、干満の差が大きいことで有名な有明海の諫早湾。これが二つ目の海。山際に暮らす人びとは、縄文時代からゆつくりと時間をかけて有明海の干潟を干拓し、広大な諫早平野を築いてきました。

さて三つ目は、日本の内海・大村湾。沿岸の伊木力では海洋性の穏やかな気候を利用してブランドみかんの栽培がさかんです。  
故郷の自然と折り合いをつけながら、したたかに生きてきた人びとの叡知を感じる旅を是非、どうぞ。

水と干拓のパイオニア! セヨ。  
旧暦元治元年二月三日は、新暦なら三月の半ば。龍馬が春がすみに煙る雲仙嶽を橋湾越しに眺めながら諫早領を歩いてから約一世紀半。  
諫早はユニークな三つの海に囲まれています。一つ目の橋湾は太古の昔、海底のマグマが地表に噴出した際に陥没してできた珍しいカルデラの海。千々石断層とともにダイナミックな地球の営みを感じることが出来る風景です。有喜港は橋湾でアジ、イワシを捕るまき網船団の拠点でもあります。

諫早の北部に聳える多良岳は、じつは雲仙岳よりも古い火山。長く美しく広がる裾野に諫早の街はあります。街の中を流れる本明川は多良山系を源流とし、ひとたび大雨が降るとたちまち濁流渦巻く「暴れ川」となります。江戸の昔から現代まで、ときに尊い人命を犠牲に、諫早の人びとは川と共に暮らしながら美しい町を造りました。本明川の水が還つてゆくのは、干満の差が大きいことで有名な有明海の諫早湾。これが二つ目の海。山際に暮らす人びとは、縄文時代からゆつくりと時間をかけて有明海の干潟を干拓し、広大な諫早平野を築いてきました。



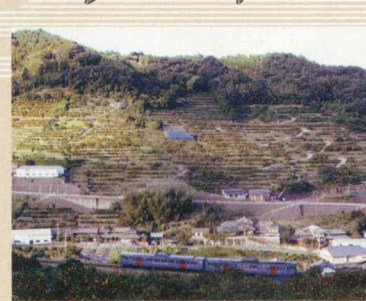
千々石ミゲルの墓と思われる石碑  
天正遣欧少年使節の一人で唯一棄教したミゲルの墓と思われる石碑は、伊木力のみかん畑の中にあります。



富川(とみかわ)渓谷  
渓谷の岩肌には、元禄12年(1699)の水害犠牲者と翌年の大飢饉で亡くなった人々を供養するために、諫早領主の第七代茂晴公が彫らせた五百羅漢があります。



白木峰(しらきみね)高原  
標高1057mの五家原(ごかはら)岳中腹にあり、諫早平野や雲仙岳、有明海を一望。春の10万本の菜の花、秋の20万本のコスモスも必見。コスモス花宇宙館では昼間の星も観測できます。  
TEL.0957-23-9003



多良見オレンジロード  
多良見町を横断する国道207号。みかん畑と並行する大村湾沿いの道はオレンジロードと呼ばれています。沿道では伊木力(いきりき)みかんを使用したシャベットも販売。伊木力みかんは日本温州みかんの祖となる2大系統の一つ「伊木力系」の直系品種。大村湾沿岸で広く栽培されている人気ブランド。薄皮で糖度が高いのが特徴。



結(ゆい)の浜マリナーパーク  
長崎県内屈指の人工海水浴場。休憩施設、更衣室(シャワー室兼用)も完備。施設内にはキャンプスペースもありオートキャンプも楽しめます。  
TEL.0957-48-2213



いいもり月の丘公園と温泉  
公園内にはローラー滑り台などの遊具が充実、家族連れで楽しめます。温泉施設も隣接。泉質はナトリウム塩化物泉。休憩室、レストランや売店も完備。  
TEL.0957-28-4141



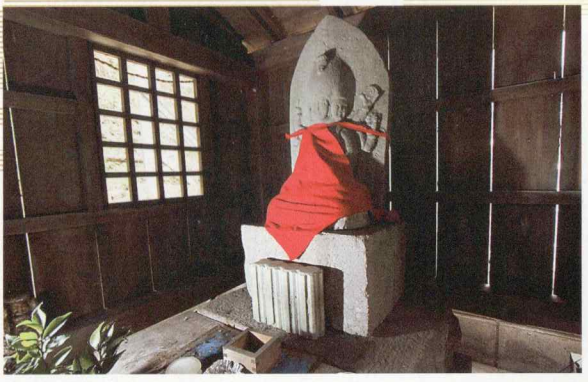


龍馬の軌跡をたどる

# 長崎

観音さまに 道中の安全を祈願する

街道の辻々で見かけるお地藏さま。日本における地藏信仰は古く、とくに六地藏は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天上の六道の衆生を濟度すると考えられています。また、道中を共にした馬の供養のために祀られたのは馬頭観音。路傍の真新しい観音様に見守られながら龍馬らは諫早領から天領長崎を目指します。



戸石馬頭観音 冠に馬頭を頂く観音菩薩像。龍馬が通る2年前の文久2年(1862)に作られたもの。



古賀人形 古賀人形は京都の伏見人形、仙台の堤人形とともに日本三大土人形の一つ。唐人やカピタンなど異国趣味から猫、鶏、猿など、伝統的な長崎土産です。昔から長崎街道の古賀で作られてきました。



さて、長崎街道である。さすがに矢上宿は賑やかだった。いよいよ今夜は長崎泊り、夢の町である。重大な報命に、浮かれてはおれぬ海舟先生は、「日見峠(はなはだ)難所」などと街道最後の峠に喘いでおられた。ワシはというと、目の前の長崎に、正直ワクワクドキドキ、ウキウキ気分だった!



## 矢上宿から長崎へ

### 矢上宿でランチタイム



饅頭 街道を歩く旅人の楽しみは今も昔もスイーツ。長崎街道沿いにはやたらと多い饅頭屋さん。別名シュガーロードとも呼ばれています。長崎市は日本で最も饅頭屋さんが多い土地柄です。 TEL.095-838-2707



コーヒーカップ 教宗寺は矢上宿の休憩所としても利用されていて、文政9年(1826)江戸参府のシーボルトもここで昼食をとったとか。髭のカピタン達のために口ひげが濡れない工夫を施したというコーヒーカップがあります。

島原街道は八郎川を渡って長崎街道に合流します。そこが矢上宿。ちなみに長崎街道は長崎から小倉まで二五宿、全長約二八kmの日本文化の大動脈でした。 早朝、愛津を出発した龍馬たち。「諫早日記」に「御軍艦奉行並 勝麟太郎殿 御目附能勢金之助殿、肥後より嶋原渡海、去ル廿三日矢上御昼休ニ而御着崎相成候由二付、」とあるように、彼らは矢上宿の本陣で昼食をとったようです。 矢上宿から小さな峠を越えると、そこが領境。諫早領から天領長崎に入ります。下ったら日見宿、そして長崎街道最後の難所、日見峠の登りに差し掛かります。



### 峠を越えたぜヨ

日見峠は「西の箱根」と言われた難所。つづら折の急坂は、海舟も「甚だ難所」と嘆いたほど。途中、峠から滑落死した馬の供養の馬頭観音もあつて、人にも馬にも険しい道でした。 峠の途中には東側中腹に二軒、西側中腹に二軒の茶屋があつたとか。龍馬一行は、峠越えて乱れた服装を整えてから長崎へ入りました。 日見峠から一気に下って蜷の名所、蜷茶屋。の瀬橋の石橋を渡ると、そこからいよいよ長崎です。 ここに蜷茶屋と一の瀬橋の古い写真があります。撮影年代は八六四年。まさに龍馬が初めて長崎を訪れた元治元年。「おまたせ!」海舟と龍馬らが街道のむこうから歩いてきそうな雰囲気です。



諫早領役屋敷 長崎開港にともない往来が増えたため、諫早領が役人を常駐させ、さまざまな事務処理にあたらせました。



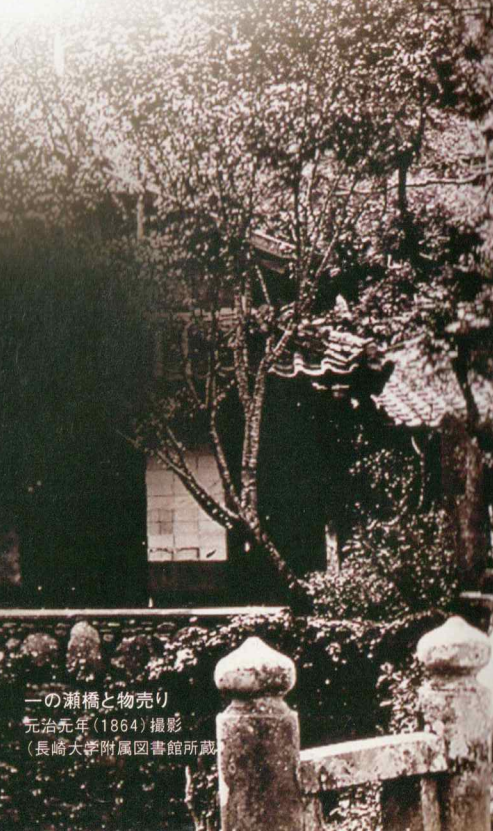
歯痛観音 峠の麓にある歯痛(はいた)観音は、おそらく弥勒菩薩半跏思惟(はんかしい)像ですが、その姿は、まるで痛む歯を押さえているよう。



芒塚 日見峠にある芒塚には「君が手もまじる成べしはな薄(すすき)」の句碑があります。元禄2年(1689)京へ戻る向井去来が、日見峠まで送ってくれた親族との別れを惜しんで詠んだ句。



領境石 領境石には「従北佐嘉領」「彼仲郡之内日見境」の文字が。



一の瀬橋と物売り 元治元年(1864)撮影 (長崎大学附属図書館所蔵)



日見峠の山道





亀山社中記念館



坂本龍馬とその同志たち

慶応元年（一八六五）に結成された貿易結社。グラバー商会との銃器の取引が薩長同盟のきっかけにもなりました。その後、海援隊へ発展。長崎での龍馬の拠点でした。

### 亀山社中



中島川と上野邸  
元治元年（1864）ペイント撮影  
（長崎大学附属図書館所蔵）



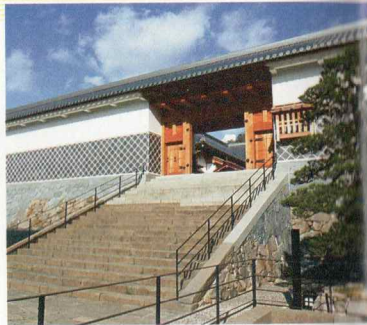
モニュメント



上野彦馬  
（長崎歴史文化博物館所蔵）

日本初のプロカメラマン上野彦馬の写真館「上野撮影局」で、龍馬もあの有名な写真を撮っています。中島川のほとりにありました。

### 上野撮影局



長崎奉行所立山役所跡  
長崎奉行所は、江戸町（西役所）と立山（立山役所）の2カ所がありました。一部復元された奉行所。



土佐商会跡



モニュメント

### 土佐商会

土佐藩開成館貨殖局の長崎出張所。岩崎弥太郎が主任となり、船舶や武器を購入。三菱商会の前身。



清風亭跡  
現在は駐車場。



後藤象二郎  
（港区立港郷土資料館所蔵）

慶応三年（一八六七）一月、土佐藩参政後藤象二郎の招きに応え、龍馬が出向いた料亭。反目し合っていた二人が、幕末回天の大事業に向かう夢と志を語り合つたとされています。

### 清風亭



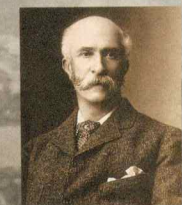
玉川亭跡  
左奥、松の木のある建物。ペイント撮影（横浜開港資料館所蔵）

### 丸山

江戸初期から昭和三年（一九五〇）まで栄えた花街。幕末の志士達にとっては外国商人との商談、密約の場。龍馬最良の引田屋（花月）もありました。



幕末の丸山遊廓版図（史跡料亭花月所蔵）



トーマス・グラバー  
（長崎歴史文化博物館所蔵）

ビクトリア風の建物が密集する長崎居留地。グラバー邸へはこの洋館群を抜けていきました。東山手の丘陵は今も当時の佇まいを残しています。

大浦居留地  
元治元年（1864）撮影（長崎大学附属図書館所蔵）

# 長崎の地

に刻まれた歴史

## 龍馬が見た長崎

元治元年（一八六四）二月三日。坂本龍馬、初めて長崎です。見るもの、聞くもの、知り合う人、何もかもが龍馬には刺激的であつたでしょう。それから三年半、龍馬は長崎と深く関わることになりました。古写真で緑りの場所を辿ってみましょう。セピア色の写真から、龍馬が見た夢色の長崎をイメージしてみてください。



## 長崎のツートップ

天領長崎には二人の奉行がいました。勝海舟が訪ねた長崎奉行は服部長門守でした。伊賀忍者である服部家の末裔です。もう一人のトップは大村純熙、弘化四年（一八四七）弱冠十七歳で第十二代大村藩主、三三歳で長崎奉行に就任。しかし、藩主不在



第116代長崎奉行・服部長門守常純  
（長崎大学附属図書館所蔵）



第117代長崎奉行・大村純熙  
（大村市立図書館史料館所蔵）

では佐幕派が台頭。藩内の平定のため長崎奉行を兼任。大村藩の藩論は、氣に尊王倒幕へと統一され、維新を迎えます。



自由亭  
グラバー園内に移築



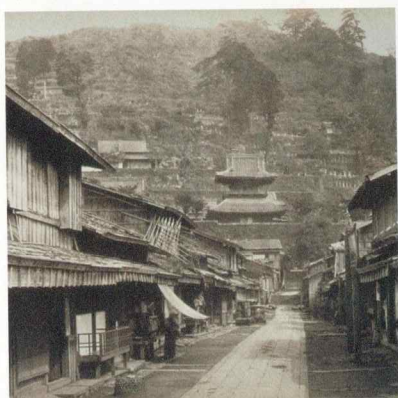
草野丈吉  
（グラバー園所蔵）

### 良林亭（自由亭）

文久三年（一八六三）草野丈吉が開いた日本最初の西洋料理専門店。のちに龍馬が起した亀山社中にほど近い伊良林にありました。

### 麴屋町の路地

興福寺へ向かう通りで人力車用に石畳が敷かれています。今でも長崎らしい町家風情が漂う一角です。



興福寺開山堂と麴屋町  
元治元年（1864）撮影（長崎大学附属図書館所蔵）

### 玉川亭

中島川沿いにあった料亭。幕末の志士達が政治的な会談の場としてよく利用していたとされ、龍馬が長州藩の木戸孝允（桂小五郎）と会談した所でもあります。



木戸孝允  
（国立国会図書館所蔵）

### 聖福寺

黄檗宗の唐寺。紀州藩の宿舎でもあったので、いろは丸衝突沈没事件の交渉の場になりました。龍馬も同席しています。



聖福寺

### 長崎鎔鉄所

大型船の建造を目的に、飽の浦に安政四年（一八五七）に創設された工場。三菱造船所の前身。海舟らが視察しました。



長崎鎔鉄所 慶応元年（1865）上野彦馬撮影（長崎大学附属図書館所蔵）  
岩崎弥太郎  
（国立国会図書館所蔵）

### 福濟寺

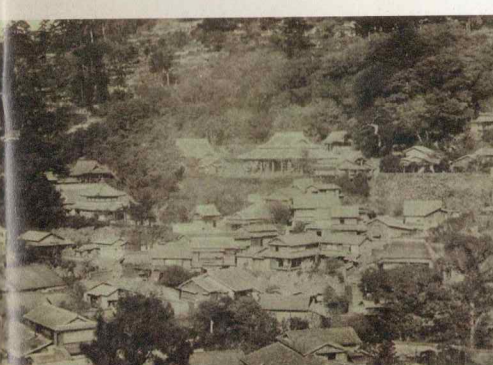
勝海舟一行が宿舎とした黄檗宗の唐寺。海舟と龍馬らはここを拠点に四月四日まで長崎に滞在。国宝に指定された建物は原爆で焼失。現在は、銀色の巨大な万国霊廟長崎観音が建っています。



福濟寺

### 清水寺と大浦慶

千手観音を本尊とする真言宗の寺院（国重文）。当時は京都清水寺の末寺で、近所に住む大浦慶も足繁く参詣し、とくに歡喜天に帰依したと言われます。慶は茶貿易で財をなした女傑。幕末の志士達の支援にも尽力しました。



清水寺  
慶応2年（1866）上野彦馬撮影（江崎べっ甲店所蔵）



大浦慶  
（長崎歴史文化博物館所蔵）





**長崎歴史文化博物館**  
近世長崎の海外交流史をメインテーマにした博物館。鎖国当時の犯科帳や絵図など貴重な資料を収蔵、展示。復元された長崎奉行所立山役所の一部も併設。  
TEL.095-818-8366



**日本二十六聖人殉教地**  
1597年、豊臣秀吉の命令によって殉教した26人のカトリック信徒。西坂の丘には日本二十六聖人記念館と記念碑があります。  
TEL.095-822-6000



**長崎原爆資料館**  
原子爆弾投下に関する資料を網羅する資料館。国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も隣接。また、原爆落下中心地公園には、黒御影石の碑と被爆した浦上天主堂の壁の一部があります。  
TEL.095-844-1231



**出津文化村**  
キリスト教の文化が色濃く残る外海町の出津を中心とした「出津文化村」。出津教会（県文化財）、大野教会（国重文）、旧出津救助院（国重文）などの史跡や、外海歴史民俗資料館、逸藤周作文学館や「沈黙」の舞台となった黒崎教会もすぐ近くにあります。  
TEL.0959-24-0211



**眼鏡橋**  
1634年に興福寺の熱心者によって架設された日本初の石造アーチ橋。国指定重要文化財。



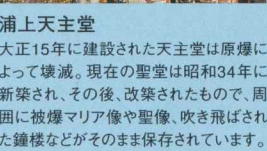
**興福寺**  
1620年に開創された日本最古の黄檗宗の寺院。崇福寺・福濟寺とともに長崎三福寺の一つ。大雄宝殿は国の重要文化財に指定されています。



**出島**  
1634年、長崎港内に築いた扇形の小島。218年間にわたる対オランダ貿易の拠点。現在往時の姿に復元中。  
TEL.095-829-1194



日本二十六聖人殉教地  
長崎歴史文化博物館  
長崎奉行所立山役所跡  
眼鏡橋  
長崎銘鉄所跡



**浦上天主堂**  
大正15年に建設された天主堂は原爆によって壊滅。現在の聖堂は昭和34年に新築され、その後、改築されたもので、周囲に被爆マリア像や聖像、吹き飛ばされた鐘楼などがそのまま保存されています。



**長崎まちなか龍馬館**  
「龍馬と長崎」をテーマに、平成23年春リニューアル。観光インフォメーション、土産の販売など多機能な施設です。  
TEL.095-829-1314



**唐人屋敷**  
1689年に完成した中国人居住地区。収容人数は2000人。屋敷周辺には堀と堀を巡らし、門番が立ちました。土神堂、観音堂、天后堂、福建会馆前門などが現存しています。



**崇福寺**  
黄檗宗の寺院。1629年、長崎に在住していた福建省出身の人びとが創建。国宝の大雄宝殿のほか、建物の多くが文化財に指定されています。



伊王島



高島町



端島(軍艦島)



野母崎



長崎亜熱帯植物園



**春徳寺**  
1569年に長崎で最初に建てられた教会、トードス・オス・サントス教会の跡に建つ寺院。境内には今もキリシタン井戸が残ります。



**鳴滝塾シーボルト宅跡**  
シーボルトが開いた塾のあった場所。高野長英、大槻玄沢など優秀な医学者を育てました。シーボルト記念館が隣接。  
TEL.095-823-0707



**長崎新地中華街**  
十字型になった中華街の四方には極彩色の中華門が建ち、料理店など約40店舗が軒を連ねます。春節時のランタンフェスティバルでは、大変賑わいます。



**端島(軍艦島)**  
長崎半島の沖に見える端島(通称「軍艦島」)は、かつて海底炭鉱で栄えた石炭の島。閉山後は無人島となりましたが、最近上陸、見学が可能に。周囲を巡る軍艦島クルーズも人気です。世界遺産暫定リストに記載されました。



**長崎亜熱帯植物園**  
亜熱帯地方の1200種、45000本の珍しい植物を栽培。温室も充実しています。  
TEL.095-894-2050

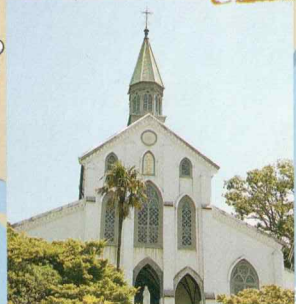


**長崎ペンギン水族館**  
ペンギンに特化した水族館。地球上に生息している18種類のうち8種類が飼育されています。広場ではペンギンと散歩が楽しめます。  
TEL.095-838-3131



# あれから 一世紀と半分

## 長崎



**大浦天主堂**  
1865年大浦の居留地に建立された日本最古のゴシック建築様式の教会堂。正式名称は日本二十六聖殉教者天主堂。「信徒発見」の舞台にもなりました。国宝。  
TEL.095-823-2628



**グラバー園**  
日本最古の木造洋風建築である旧グラバー住宅をはじめ、由緒ある洋風住宅を多く見ることができ、長崎を代表する観光地。園内2カ所にあるハート型の敷石「ハートストーン」に触れれば恋愛成就に効果あり、とか。  
TEL.095-822-8223



**東山手オランダ坂**  
開国後、最初に許可された外国人居留地。長崎では西欧人はすべて「オランダさん」だったので、彼らが往来した坂道のことを「オランダ坂」と呼びました。

**龍馬像いろいろ**  
現在、長崎市内には5体の龍馬像があります。それぞれの龍馬に会ってみては?  
TEL.095-829-1314

- 風頭公園
- 丸山公園
- 中島川公園
- 若宮福荷神社境内
- 龍馬通り

**長崎のココロは不滅!** **ゼヨ。**

旧暦元治元年二月三日は、新暦なら三月の半ば。龍馬が街道最後の難所、春寒の日見峠を越え、はじめて長崎の地を踏んでから一世紀半。龍馬が魅了され新生ニッポンの夢を育んだ長崎は、横浜や神戸などが開港され榎舞台の幕は下ろしたものの、その精神はいまだ健在です。

元亀元年(一五七〇)長崎はポルトガルとの貿易港として開港されると、「東洋の小ローマ」と讃えられるほどに発展。禁教令が出ると市中のポルトガル人を出島に収容、そのあと寛永一八年(一六四二)彼らに代わってオランダ人が出島の住人となりました。いっぽう中国人は元禄二年(一六八九)唐人屋敷ができるまでは市中雑居。当時の人口六万人のうち二万人が中国人でした。出島や唐人屋敷を拠点に、日本で唯一、世界との交流が幕末の開国まで続きました。安政六年(一八五九)日本が開国されると外国人居留地には大勢の欧米や華僑の人びとが暮らしました。異文化が皮膚感覚で日常にあつたこの街の歴史が、長崎の「ココロ」をつくりました。昭和二〇年八月九日、原爆により壊滅したこの街が、平和都市として強く世界にアピールできるのも、その長崎の「ココロ」なのです。

市域の拡大で、軍艦島と呼ばれる端島、フランス人宣教師ド・ロ神父の理想郷「出津文化村」など、見どころも倍増しました。

華やかな歴史と豊かな精神文化。煌めく歴史の欠片と長崎の「ココロ」に触れる旅を、是非、どうぞ。





### 歴史 ウォーキングのすすめ

健康のためにただ歩くだけではつまらない。どうせ歩くなら楽しく賢く歩きましょう。島原・長崎龍馬の道沿いは、歴史の香りがいっぱい。龍馬が上陸した島原湊の船着き場階段を龍馬になった気分です。龍馬も見上げてみませんか。龍馬が歩いた道は、現代も主要道路として残っています。

歩く際には、ながさき龍馬くんの道標・説明板を目印に歩くのも楽しいですよ。街道沿いに、島原市で二五カ所、雲仙市で五二カ所、諫早市で二九カ所、長崎市で三カ所に、道標・説明板が設置されています。「こんなところに道標が」という新たな発見にわくわくするかもしれません。



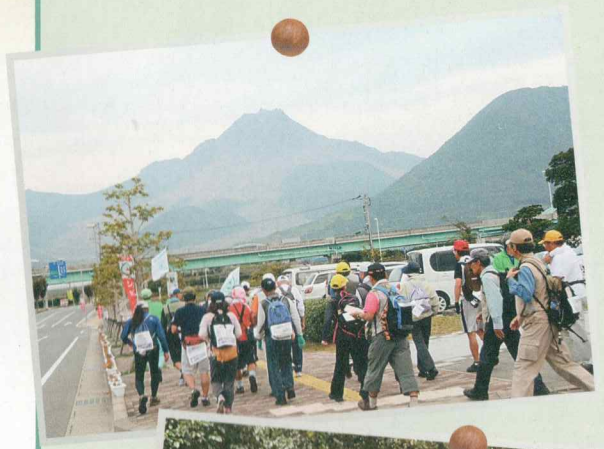
### 島原編 Walking Event Shimabara

10月

## 島原半島 ツーデーマーチ

清らかな島原の湧水とのふれあいを楽しみながら、秋の島原を歩きます。爽快な気持ちにさせてくれるウォーキング大会です。

●島原半島ツーデーマーチ実行委員会事務局  
TEL.0957-63-5561



島原市から続く島原街道・北目道沿いと島原道沿い、および長崎街道沿いに、ながさき龍馬くんのイラストが描かれた道標が設置されています。道標を目印に歩くもよし、ドライブするもよし。龍馬が歩いた道をのんびりゆったり迎ってみませんか。



# 旅の達人龍馬が歩いた道を歩く

### 長崎編 Walking Event Nagasaki

10月

## 長崎ベイサイド マラソン&ウォーク

長崎港の海を眺め、爽やかな秋風を感じながら歩くコース。かつて日本で唯一の貿易港だった長崎の面影を日本有数の斜張橋である女神大橋の上から眺めましょう。この海を拠点に幕末に活躍した人物たちが旅立っていました。

●長崎さるく・女神大橋ウォーキング大会実行委員会事務局  
TEL.095-843-7000



### 諫早編 Walking Event Isahaya

3月

## 諫早のんのこウォーク大会

諫早のシンボル眼鏡橋や本明川に集う鳥や橋の景色、多良岳の遠景、諫早中央干拓地などを体感するコースです。本明川の周囲は平坦で歩きやすいので、自分のペースでのんびり歩くことができます。

●諫早のんのこウォーク大会  
TEL.0957-24-6776











各エリアのお問い合わせ先

〈長崎エリア〉

長崎市さるく観光課 (095) 829-1314

〈諫早エリア〉

諫早市商政観光課 (0957) 22-2647

〈雲仙エリア〉

雲仙市観光物産まちづくり推進課  
(0957) 38-3111

〈島原エリア〉

島原市観光・ジオパークグループ  
(0957) 63-1111

長崎龍馬の道活用広域観光推進協議会  
(島原市観光・ジオパークグループ)

TEL.0957-63-1111 FAX.0957-62-8006  
E-mail : kanko@city.shimabara.lg.jp

平成22年度長崎県21世紀まちづくり推進総合支援事業